

令和の脳卒中 ディベート10 番勝負

脳卒中治療ガイドライン 2021 とその先を 識る

本誌で脳卒中の特集企画が組まれるのは西山和利先生（北里大学脳神経内科）が『脳卒中はこう診る—新ガイドラインで何が変わったか』として企画された 53 巻 2 号（2016 年 2 月号）以来、実に 7 年ぶりである。この間、脳卒中を取り巻く環境は大きく様変わりし、脳卒中・循環器病対策基本法の成立・公布（2018 年）、血栓回収療法の time window 拡大（2018 年）、一次脳卒中センター（primary stroke center：PSC）の認証（2019 年）、脳卒中と循環病克服第二次 5 ヶ年計画と循環器病対策推進計画（2021 年）、など枚挙にいとまがない。これら脳卒中制圧に向けた動きに対し、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）蔓延による医療崩壊が大きな影を落としている。対面での学会参加も制限され、現地に居てこそその空気感や肌感覚を得る機会も失われて久しい。このような背景を踏まえ、今回の特集は「脳卒中治療ガイドライン 2021」、「ディベート・セッション」、「令和の脳卒中事情」、「読者の識りたいに答える」の 4 部構成とした。

まず 2021 年 7 月に発刊された『脳卒中治療ガイドライン 2021』を紹介し、「ディベート・セッション」では 10 のテーマを取り上げた。これらはエビデンスのない未解決の課題や、治療に携わる医療者の裁量に委ねられるものであり、「ガイドラインのその先」に位置する内容に当たる。執筆者には自身の治療スタンスを捨て、指定された Pro/Con の立場で執筆いただくよう依頼した。課題を明確化したうえで企画立案者がコメントを残し、読者の知識の定着を図る。対面学会で採用されるディベート・セッションを紙面上で再現する試みと理解いただきたい。

次に、新しい元号での初の脳卒中特集でもあり「令和の脳卒中事情」として冒頭の脳卒中医療情勢を紹介した。これは日本脳卒中学会の今後を担う中堅に執筆を依頼し

た。読者からアンケートで寄せられた要望の多くはディベートに盛り込んだが、漏れた要望のいくつかを各々の領域のエキスパートに「読者の識りたいに答える」として執筆をお願いした。

なお「識る」という表記には、知識を得る、見分ける、受け止めて不可視な領域さえ認識しようと試みる、頭に納めて培う、という意図を込めた。「知る」では、見た・触れたというだけで一瞬は頭に入ってもすぐに消えてしまう可能性があり、あえて「識る」とした次第である。



平野 照之

杏林大学医学部脳卒中医学教室